

唐太日記

下

和書門			
二	九	二	類
冊	函	號	
一	五	〇	
一	九	〇	
冊	架	號	
二	一	〇	

內閣文庫	
三	和
八	書
九	類
二	
〇	
號	
二	
冊	
一	
四	
架	
五	
函	
一	
冊	

內閣文庫	
番號	和 28920
冊數	2 (2)
函號	178 394



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





身氣志郎 松浦弘 評注

甲唐太日記卷之下

廿五日^六昨夜より引續きたる風雨にて船後へ

あり早朝より起出旅装し甲斐のれし糧食を交へらるる

船のれりとかく空しく日減送るるあり心苦しれり美人

共船と出されし冷きありと朝を被ハ^根のとのるる根と入

是云来ると粥と焚て食ふとハ^根のとのるる根と入

如くそ風味雅ありのちありて此四より白鳥と云輝を

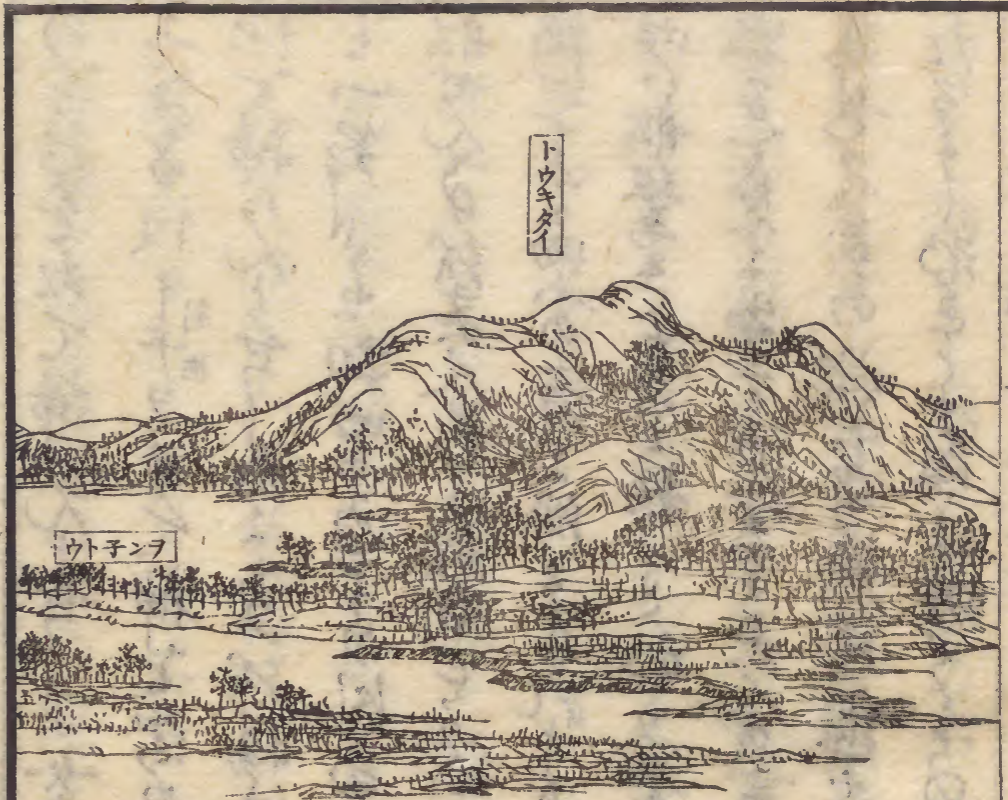
或る言持来り玄米と入是本紙割りて精^{ヒラキ}けきり余も是と

唐太日記 卷之下

助けく揚きし總て妻家の不自由あること言傳へ堪へたは
あんとほろく懐物なし手紙洗ひ口嗽んとく不鹽あり
後て余と指を倒さるし一燈の方より水と入是とて手紙の
中へ嗽きしきりやまこ火種とておちし一割は石の凹きり
火をふまきし

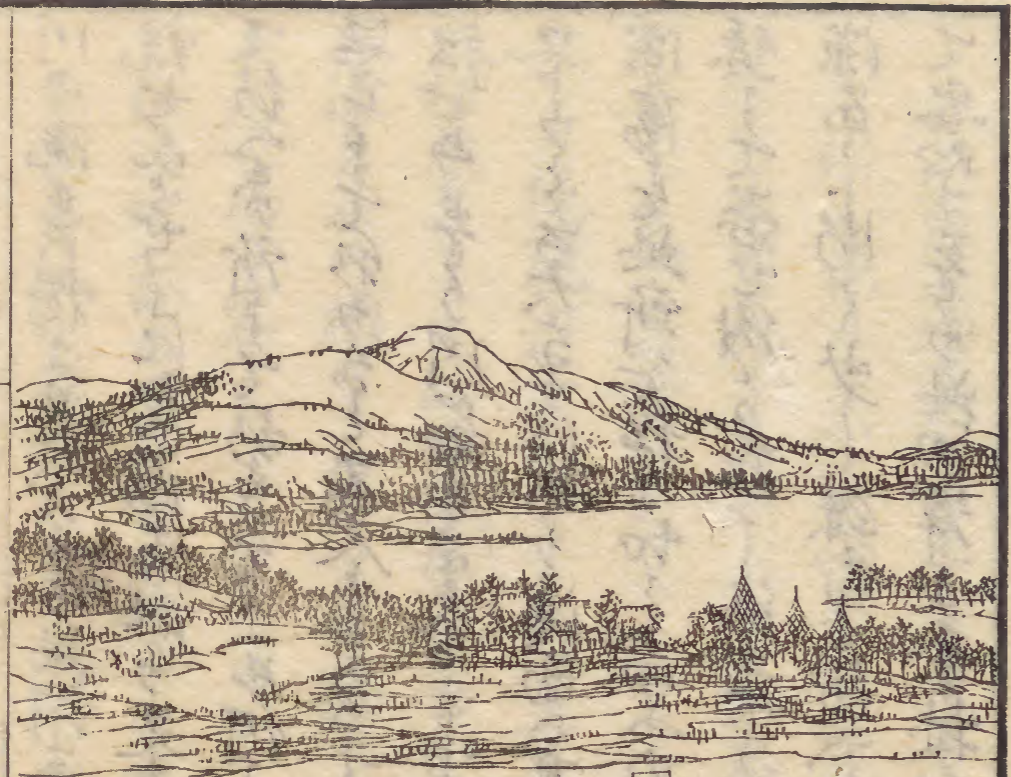
注此石ルウタカの水源よりを出入等船漁よりしは耐
刻り取り重箱方へ配せるとのよし一那り運上屋近所の玉
人等六随分火種位はりえられも此石と用ゆるは此地の
風と水なりたり實は石を赤炭散とて赤と名のなり
是種如き餘り小庭の上の穢きこれハ傍に掛る地掃の指

のときをぬて掃りんとせしよ女妻妾とあけくあつち後
あつちのイナヲとて神と祭りたるのよしあり神を
地と掃りんとせしよ女妻妾とあけくあつち
も一那り取り扱四つとより風もも少く穢き水は出
船せんの紙美人共く結問じらふ此庭よりき里余川を下りて
海よりそ向ふの岸に海もあれもよし所赤壁とて風波甚き
けし船繋ぎしある程しと水り余乃き言物と等と運し海の
容子と身よあまきり実よ美人の言の如く風波あつちとて
忌畏くあまの状なり此海船美人の千島東沙都伽と連り
たるも一那り取り扱とて穢きものたぐく物清きと作ありは是れ



武郎園

Vertical columns of handwritten Japanese text in cursive style, located below the landscape illustration.



ナイフツ

海を
舟の
あ
うけて
篤

月大日記 一巻之七

川の流る程を見せしむ此河原に鶴白鳥群居る或物者
 鏡せんとせしに忽飛去れり又是より小舟を御り先川と下り
 て初へ来所まで約きてよ何よりしては船客ら其より何れ
 返りて来りては美人とのをすしりて擡て漸く言さるは
 船とありきり川船を乗余も下り海面は出る左りの方ナエラ
 ツトウと云大なる沼あり海面は高波お寄河水激流して船
 漂屬を此所を横り切て向ふの岸は急んとはるは赤土の陸
 壁として雲せ附りたり海岸よりお寄たる枯木乱れ横り空
 隙あり漸く少く疎なる所へ船をさし入るは皆に飛りり始
 て安心しきり此切岸は余杖取て数字を題せり

注此崖赤砂更りの土りてき度この洪水は船運落る如あり
 よりて祀りあるも惜哉其母とも待たしと消去せんは数字
 とら何を祀りありしとらん思はる日本のも書し
 ちりて祀りありぬ

夫より絶壁の上は漸くしてひききるは此所一面の草系と松
 の枯木多しハムナスカンサウは花盛る四五丁初て傍り下り
 小流は木の横りたる所の點しと重なる余とてアイ地名と云所の
 美人小屋は宿と

注此地一面の平地東向して海岸白沙地にして歩初めて悪
 一家の墟る板山ナイフツのトウキタイは纏りたりと名

アイウシナイあるは今アイとのこち通はアイと華麻の
事ウシと多しナイと沢あり此草夏の沢目と多き故
に此名ありと思ふ

夷人名とタシトリと云余今朝とハ一と云草の根と入るる云
米の粥を赤小豆の入る粥と食せし此夜後痛しと大に
悩めし終宵少くも睡と交るる能はし能はし不使君より
賜ひし正氣散ると用ひて曉方と少くも覚るる事あり
考程大に延引せり

夷家とハ厠もあり笠も那ハ燈火もちり腹濡あり付
けし難き事ありありあり

廿六日今朝の晴きり四時過ぎにアイと出り腹濡りて大に
氣力を損し食氣をなれし生徒多し草系を或て下りて
海辺とあり又或て下りてアイベツと云小川を舟にて渡り或は
後してシルト口^{地名}夷家と朝飯とあり今日と出用
よ共志あり暑氣と催ふをりより小川所とあり又
五里^{地名}ありヲタサンベツ^{地名}船渡りて越て云下程
めて居村と云名ヲマシ子^{人名}の家と投宿と

注此地も同じく東向海岸よりしてヲタサンベツと云川あり其
北岸^{トヤナギ}柳赤楊等の山際と家ありヲタと砂とサンと
流とあり候此川筋石砂流と出るとして考ふ

此家余程後く四間より五間より入りし極或りありて鼻氣も極
直養の書状を廻強く有りて言来き程とシテ、ヲロよ残一五
よ也且糧米不給俱よトツソの嶮と揮了程一即今西浦(赴く
魚)とわらうとわ相る勢を脱して皆く其肉を食ふ余は不使あ
きはとて白米と粥を煮て食せりあまら此海岸ナイフツ川の
シテ、ヲロ也よて平曠の沙場にてト、の木又ハ船夷松の樹多
道と強一

廿七日朝より雨降りラタサシと出小川或り越部里余りてマ
トマナイ川拾間余夫より去程半程してキトウシ美家武朝
此迎とる以ハ大霧りて咫尺も辨しこく此海也よ海嶺の死

したるの半身砂と埋をれらる半ハ肉を切死りたり腹内
太サ四年程のめーキトウシ地美家よ懋と極上よ海嶺の脾を
掛り息吹吹と海嶺と水約の油と貯りて其形ち大
胡蘆の如し空夷家船の切身と極上よ吊一た其ハ鼻氣極
難一或三丁もてホロナイ川ハ四五間越てまゝ去程半程して
ベケレイベツ名地川巾或三間夫よりまゝ去程半程小川或り三間越
てシテ、ヲロよ著と其入々シテ、ヲロ川巾四五間あり此所山
小澤て村居とありて後の山とイサラ地ノホリと云イサラ元
た多のノボリと山ノ山ノ此山元きる所ありて此山ノ山ノ
鼻氣程海中より出たり

注此地の地形則本文の如しは村と山の相ありて少く南と東より丘前一帯の暗礁有る沼形をなしたり地名ニラと名ありのラロと多るに儀あり

夷人の常食コロクニ秋冬ニコロクはあまの草の莖を乾貯し道き水煮して油揉の油と少く入食と塩入食せ及玄米と少く是は湯と煮て粥とす油揉の油水釣の油と少く入食も脂揉あり一帆立貝を鹽り此村人家凡十二三軒もあるけきとも運上る人種よりある甲斐と云ふものありとも皆老人子供病者のことありまこと云ふ女夷の運上る人種は家と居る女夷の懶惰たるもの甚くして夜も怠るまじくお師朝

起るも手水と云ふものあり一燈の端と燭子と燭とをばりありに儀ありあつた女夷の男夷の信したるに食事の手傳もさせぬあり小児の初歩の時より弓矢と持て走りあつたを能く教へるも也は此地は海と張るあり人々南と北と子供の肉よりして此地の凡して男子は皆小刀たり小刀の形を腰に提ぐるに疑と提ぐるや男子女子共十四五才迄は皆髪をエキシボと云ふもの紙附あり

注エキシボといふ所の儀と云ふは此処或は所のものあり山麓液りの青玉と二百斗も三角形を糸にて串穿し環を附是と名懸より玉極美まことあり

此島夫のたうハカノと云ふものと
 キツクは引掛ありとのも係
 せり抄一にて内地の出入の
 のり所なり
 ナニハカノの多供を助
 エキとホとのと云ふものヨキ
 云と云ふ事ありとの事なり



武郎圖

後方の船
性との事

廿八日朝曇りたれと云ふり晴り五の以り南所を出る
 山の裾と云ふ所ニエナラサキ^{地名}シコマナイと越て元と置定余
 てマーヌイ^{地名}と直養の作の地所にて滞留して余と神
 至りけりし我待兼て今物出さし今の程とマーヌイ川
 渡りたる所なりと云ふと今少しとて逢はざるを遣相ありし
 前路よりと云ふ所松岡等の書状と持りて飛脚は今船を
 爰へ着せりと両士ハ一夜夜以ウエンコタン迄行くと初て程ヲロツ
 人所住の地にてはと云ふとの志ありし余は是よりトツツの
 嶮と探んるを船吏船と云ふ

注マーヌイの演形東向たりワアレ岬右シラ、ヲロのエナラ

サキとの間より一湾をれ一里所マースイヘツと云あり其
南岬の家右一後ろの櫃木を中ふ一ツの沼あり此沼
水の落りあり故に急水のよ一帰路西境へ越るふら此川
筋に入らあり川の壯岸七八下よヲハコタンと云処有る愛は
堀君の宮され一鹿島の社あり夫人等々願ひの削花を
深善中に立ち居 皇國の御威積と翹との形象と我
こをきりける

ワレ岬絶壁奇氣ありホウコタンと云所夷小屋ありと云
石徑夫より大なる石ありクサレ子グと云夷小屋あり此処より
マースイより海上九二里と云志あり体ひい出処のルニハ子名

と云美人と嚮きよして演傳ひして約よふムシリと云遊
鳴ありて臨群居と云一五六丁より一ツの岩海中一得
路をきり

注此細島の美人の竹処と云志ありあるれと云と云チカベロシ
ナイの者あり此地五丁計の妻居と云右にウシエンヘシ
たりと云エンコタン子岬は對峙して一小湾と云一岬より
島あり後ろの櫃木を中ふ川ありと云岬の家右に地
名をチカツプウシナイの流りありと云此地鷗鷺鷺ハツと云
乃つとエトヒリカをぬりて東りて餘さぬりの水鳥の歌
島帯に群居をけり故に此島ありと云チカツプをきりて

ウシと多しといふ故あり

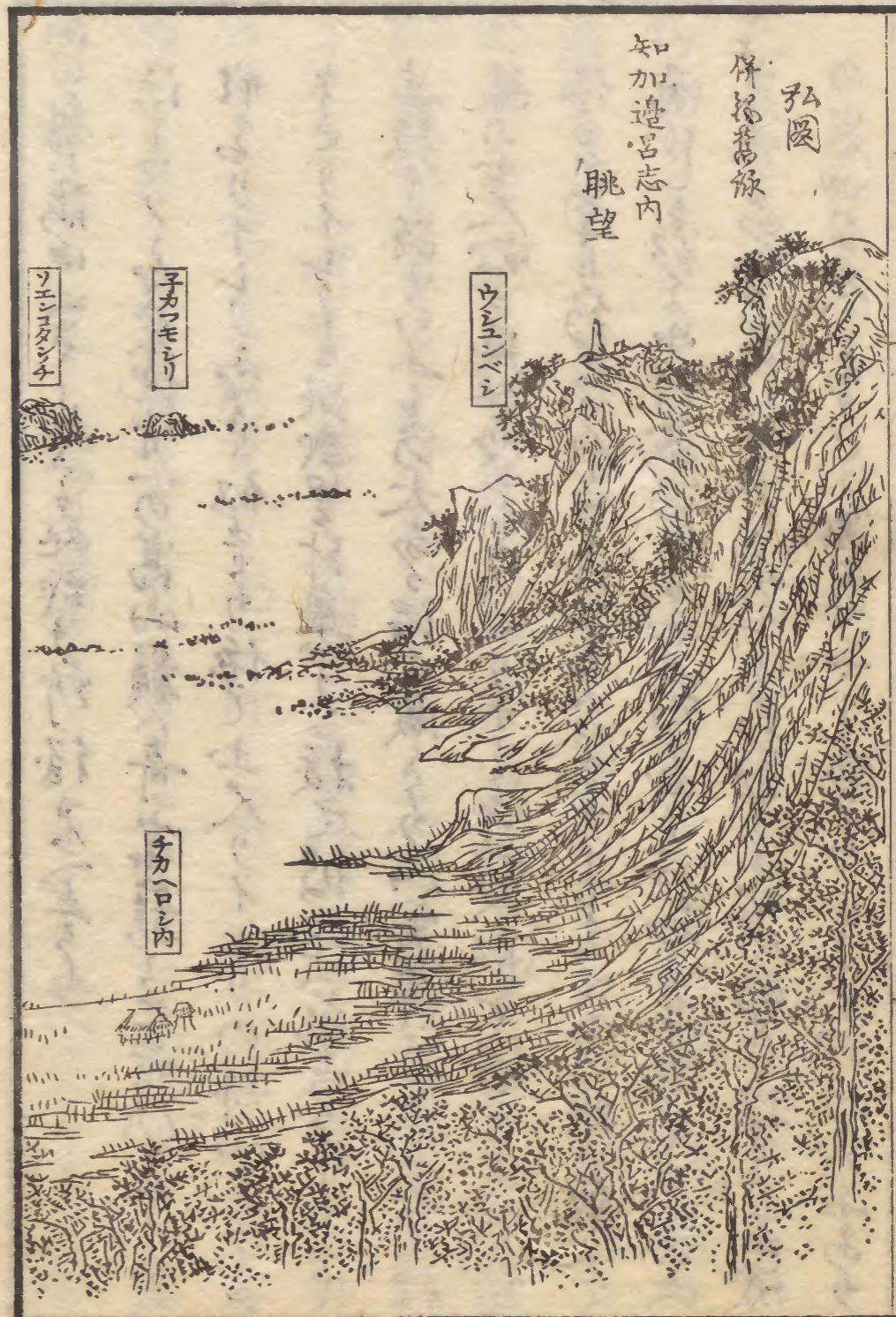
夫より岩窟中と初より十間餘まで始てありの傍より此所よりテカリマと云ふ奇石あり爰よりトツソの山の側面を見れば巔雲は隠れて見えず余トツソの麓より登りて見れば潮満る去路と云ふいふと云ふ退くと云余押さずして或ハ潮膝の上より又いささか石穴と潜り一岬と云れはまこと此の岬有て潮く之捨テ余を経てトツソの麓より海岬小出より是より後壁より潮水深く一歩も進めかへトツソの樹木生茂りて多高山として麓の方こそ余の所亦壁より臺余も奇魚一爰より一條の瀑布ありニライといふこと此の方

山の裾ハ海中へさへもたれり此即ち所経るべきなり

注トツソと東地才一の高山巔ハ奇岩簇々として見ゆ其形ちリイニリより似たり依て又リイニリの婦山メノヤマと云ふことリイニリも此即ち針鼻より接て彼壁へ飛去りて其接し跡といふもの大なる沼と云ふ山靈著しきなり其味の出入必し此林麓の字ノホリホと云所ハ船と云せし則ち作らざる初より初より余チカヘロニナイより先の処ハ船にて魚じし形もや何滅するや未だ知らざるなり其穴の岩穴といふとバツテチシといひく穴の形も接しと云儀の岩岬ありしと云テカリマと云ふは岩岬の形あり

私園
併採舊録

知加邊呂志内
眺望



ソニヨシチ

チカモシリ

ウニシシ

チカヘロシ内

志の丸
さうまはまら
こまら
経のひのいさな
非やうん

トツツホリ

レタリヲタ

リキヒリ



巨岩にて余の船中より眺むせし是より先ハ中々初らざる
るハ一月少くもぬらぬらそのトツソとらハ此処漲るその際
るハ少少の雨あふ先生此処まで暮りゆくも奥と探らん
とせしきり少くも不審也忘るハ是日記簿書の時より
思ひ得る様にあはむ

余猶も一歩と探らん少くも同初のもの得語を失らんまを
おき属従も止むことゆかりして引返せり実ハ潮水漲り来
る海もあつしその日あは倍して岩根を破り初る危きころを
あつ辛りしてテカベロシナイものころを食食と又舟もあつ
とほく風浪午前よりあはくわつて河水激しる船深漾

あつ潮と打入る度あはなるあつ潮とあつ洋中とあつ海
小海あはなる船頭の美人高うう小唱へ言ひたりとさう
あつけはる豊吉も聞かせて書附置り

- ツカヘルシナエ 地名 トマリヲロ 湖 カムイ 神 ヲロロリ 様の方 トシヨフノカムイ 山の神
- マトマイカムイ 松前殿様 ウ子ノカモイ 同一エの神様 子タシエ 有故 ウ子カムイ 見て居る エンカラツキ ラムラ
- ツケノ たあ ヲマナシカ たあ トカンナカムイ 神様たう ヲラロワ その上 子ヤカシ オノ ニケタ オノ エンカラ 神様たあ
- ラムラツケノ 連者て ホツケタラマ 暖日時節たう マナニ 向へ ツキ 着る ヒリカ よあ シリンヤツテ 気 アフト 雨
- イシヤマノ あ シリ子クシユ 天気たう アシン 新あ ノカムイセ 神様 エンホロリ 悪いあ ツキヒリカノ 老人おけてたま

譯末々々々々々々

七の時前よりマヌイノ度まで今日とあはきは是へさう使情もて候

舟の余程暑氣を催きりされとも綿入の朋若^{トウキ}律切^{ハンテン}合^{カツ}杯^ハまの
 て日向と歩初たきとも汗ももどきと異候志る趣〜
 廿九日朝晴とちマーヌイ川を船して沿り初より巾拾四五間と有
 船一西岸櫃の木材とて水まで清冷あり尤右の属ぬれ武田余
 してチニア^名ニ^地と云処より今も亦山路へ分け入るれハ例のアツシ
 と恙とす乃路傍の木よ

是處此山とけ衣袖せをみ今も和菜も成すぬるぬる舞
 江此所船と圖へ引上直是より濱路に趣るゆあり傍てよの島
 あつこのチツフヤンゲあらへ〜と聞ゆりなる
 ち、山路よりあつ此所と云ニヤも芳らぬ難きとされとも兼

て使君の通行有へきゆあるれハ直養美人と命して草を蒔くせ
 ちとせしむ通行ありて柳〜や〜又飯もサ〜山と上り又法よ
 下りあつ然してや〜山と登り〜処とて休む此辺ケヨミ^名ウ^地
 と云処は使君の爲に飯小座を掛きりゆあるれと余知るさうなれハ
 寄て見せりさき是より先き聖堂程して美人等或人來り
 小座不言語不通空を別進去る將して豊吉跡よりあり〜
 彼或人の西北廻浦の方より東地へ白米と申せりあり傍てその内
 五秭余分ておきり〜と同約今宵より白米と食と〜して喜
 ふ又足跡より来るもの左鱒の尻を煮りぬと〜尻括ひぬれり是
 と瀬の爲て此のこ食〜捨るありと元瀬と魚の尻のこ食

ある余ら拾遺より魚を煮て小飯を割て焚火にて
炙るに醬を添えて余貯るを味の難味ゆと謂て食し味甚
よ味此飯は海辺に宿したまはる魚不足して今夜
漸と一箇と喉をされども鮮魚ありけり今日と不圖七瀬
のふふ美味と嘗めり又昨夜去来して釀する白酒を樽
来りて船の上の場にて夫人も亦寄贈するにサーブニ
余ら嚮けして別に加ふるに茶籠に入りて持来りサーブ
ニと一連は五六杯と傾て心地宜氣あり余少く嘗て飲るふ
醜の膏より味よく少く甘味は甚く酸きもの甚く是より
小高き処まで飲んぬ此里余と息ふを昨夜直養に宿し

きり小舟掛より一宿をり

注按とらに此処にカアマナイといふ名ありて水戸あり
お上人号著しより山越への舟の必止宿とる処なりと

晦日朝曇りたりきり余とて大木の倒置する所は体玉此木
美人も本幣とてきて余も又鉄の矢の根夥しく刺りしは
チトカン又シともいふ

注此樹數圍の大木なりて或二十年昔倒置して此處の
の出入り勢と減んぬ此木の梢は向て船をり其的とあり
ありしとあり生涯なるあり種歎き事と射撃するに似と
之れくは顔一皆試して今も滋養く刺りしチト

射カニヌシとら當り利さる澤のよ〜形り同名トシナイ
チヤ越りもあつた〜ワールのサ〜北シマリとら子モ口越等
を條所〜ああ〜

此前後分水嶺あり夫より武里余躋攀してクニユンナイの川上
字チベアケといふ出きり此処ウエカハ上川修二即ち今同也抗あり余此
所にて樹を削りて

東涯探遍又西涯短褐孤筇涉峻奇嘗盡瘴嵐多少苦便
知我亦一男兒

此所より船式艘と稱したる是と直養余〜とせ置〜
是より葉船〜とらん人多く〜船底や〜とすれハ沙は緒〜

傾〜と感〜ありき艘の船より荷物人ま〜と葉船〜して六人
漕船〜た〜と〜ま〜と〜船底や〜とすれハ沙は緒〜
ユンナイの書と

輕風一路掉漁船六月荒陬未脱綿兩岫幽禽弄嬌舌韶華
長駐九春川

此所美家四五軒あれ〜人豪ハ〜の〜〜後小舟を建
たり此番人と馬吉と云上川は從ひて美地地ポロコタン地名
ま〜長吉川就作〜連〜道ゆりた〜と〜ありさ〜クニユンナイ
川落口を三拾間もあつライチ地シカ名の川落口を是よ三倍すと
馬吉の物語りあり

注此所西海岬平地一條の川あり先生舟より行り流也
又峯ハ川の南岸より此処をウスのサハれるエニルカを
タクタクヘウシの岬對峙し一小湾をなすなり波浪穏く已
故に此名あるクニエニと浪無くと云候なり

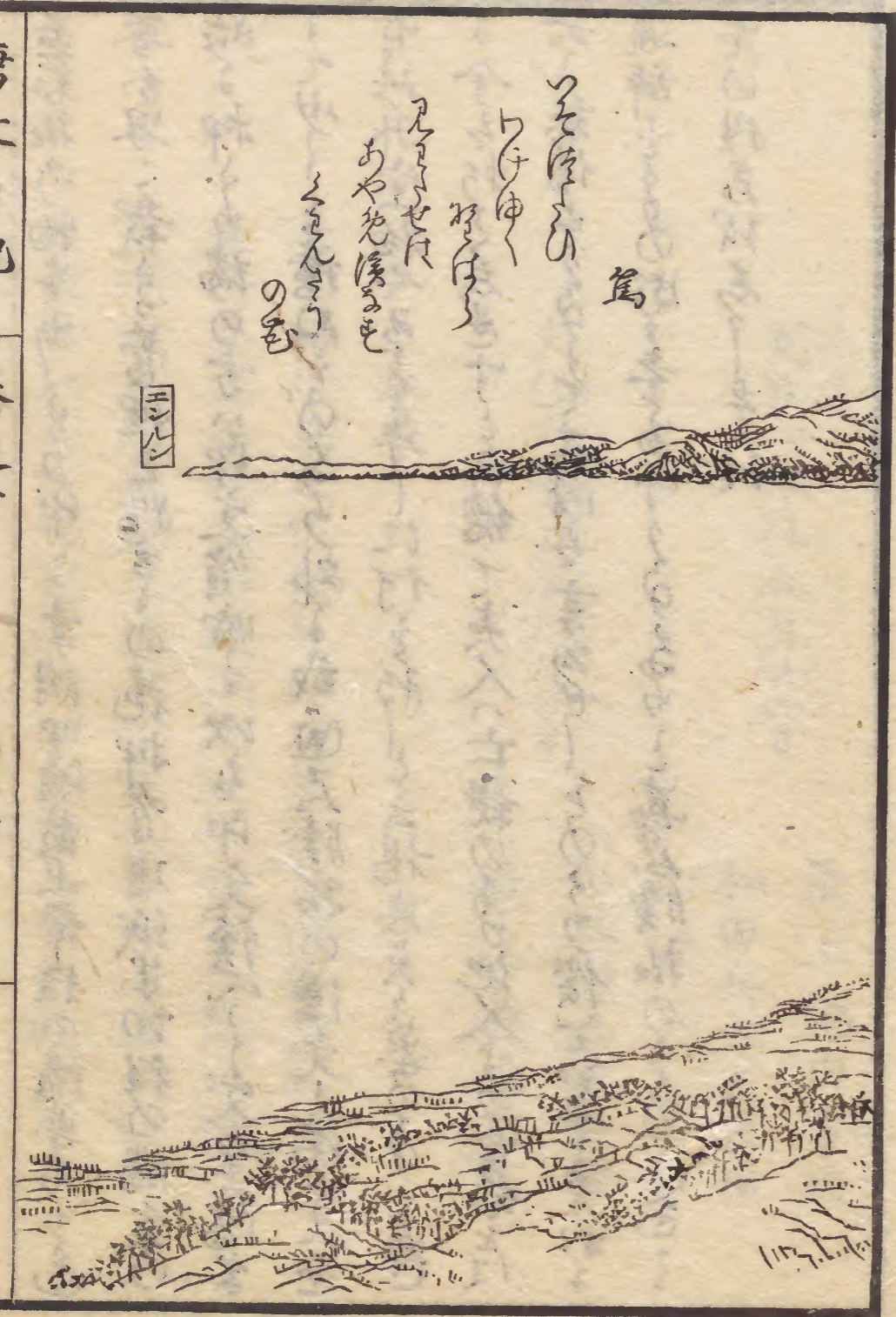
夫より信傳ひ武里奈よてナヨロノ者一由所乙名トクランケ
人の家子泊と此トクランケと揚忠貞といふ者の曾孫あり
よし今日直養の御堂より家子泊に其妻をよへ大綱
鯨の切肉を入水して煮く夫人共ニ振舞振子をとり始り揚
サアブ二人ケトウシ人トメカアイノ人坐せり又此家子泊白髮の老
人同く坐したりトクランケ又あるの各海扇と本より傳りて是

く塗るる物も切身と盛て食と各一椀の食一椀して扱ふて置
を扱ひよる一毒或は神とてふ事あるとて妻へ返せり

注此島の風とて出入りとも和入りとも客の村ハ何島と云
ひのれと直は端とて若振舞と例より五部有る村ハ善名ハ
五部より一種の食物と持来りり饗せり其食器ハ多分帆立貝
ちりハ赤とて小判形ハ薄く彫りみち持来り耳と傳り物も
是を子マと云ふなりそれと食一椀よりて必と本文の云く
ちりハ神とて扱ひ返り洗やといふ事と云候

妻ハ其傳洗ひもせ及して箱中よりウサ若島の此トクランケ
来り余揚忠貞の物のり一見物に成りて其言と云て言ひ是





鳥
 久春内
 眺望
 弘園

三ノ



久春内
 眺望
 弘園

三ノ

唐紙半切程の満文の
始に押しり端の方印文消滅一
次印文後へ一文字の満字
して少くも残るものあり外は
或通尺牘紙の漢文と満字一を
有此外宝物やある尋に何と
か云揚忠兵衛の墓のりも傳
ふ今と朽く志違すと云總て
夫入亡親のり他入より言
知きは
大に愁傷と云るのり其時
と云あせしものより償と
おとるなり
通辭と云るのり遊と云る
ものありと其の傍紙のり
の上包
たの姓名残るなり

孟和紙の物を出しり中より
其附四通最上常程の添
あり是
要分界、裁り管理之姓
まの花押有唐紙半切程の
満文の
始に押しり端の方印文消
滅一
次印文後へ一文字の満字
して少くも残るものあり
外は或通尺牘紙の漢文と
満字一を
有此外宝物やある尋に何
と云揚忠兵衛の墓のりも
傳ふ
今と朽く志違すと云總て
夫入亡親のり他入より言
知きは
大に愁傷と云るのり其時
と云あせしものより償と
おとるなり
通辭と云るのり遊と云る
ものありと其の傍紙のり
の上包
たの姓名残るなり

寛政四年壬子五月廿六日

最上徳内常短

和田兵太夫典恒

文化五年戊辰六月廿日

小林源之助豊章

最上徳内常短

奉

旨賞赫哲來之佐領付勤璋等抵至徳撈賞烏林
查得各處各姓哈賚達俱赴前來領賞惟陶姓哈賚
賚達近年以來總未抵來領賞每年憑以滿文割
付領取似此情形寔非辨公之道耳聞西數大國

唐紙半切程
卷之六
二十八

唐大日誥 卷之十一

與陶姓人往來是面是以煩勞
貴官如遇陶姓人切爾曉諭令伊明年六月中旬
前來領賞如不抵至即將此姓人銷除永不恩賞
故此特懇

賞烏林官

佐領付勒琿

雲騎尉凌善

防禦德僧尼

防田夫大夫與
最上野山常

嘉慶廿三年夷則月十五

耳聞

兩散大國原因並未知情吾未

大清大國恩賞烏林亦來者各官負以直驗者不

負自國故此賴一日來若有順使者此處原由一

竝分別攷求覲直須知寔荷

大清大國官負

拜純

唐大日誥 卷之十一

大衆六觀百凡

致令以時平靜庶幾以安

實自國及此際一日來未嘗斷對教此意中一

大衆六觀息實此林亦未嘗有言其以真解者不

所謂六觀亦因道本以計其本

本開

卷之四三下天四六十五

轉

此部通本其...
以...
...

清用

此書計の寫と...
...

馬沙...
...

カラフト島

ナヨロ俣

ヤエンコロアイ

此書の最上巻の...
...

注此処商成向於海航ししと想て海岸崩岸多し其地一條
の川ありて其兩岸より人家十余軒家店とナイヲ口を伏たき
しとのみ候あり

七月朔日 朝晴きなりトクラン人^名の家とむ前の川と小舟にて
舟に後進しあり是より七里程赤土の切岸にて湖橋とせし
来り所あり風波よく通行むて難候のよしと云よりしてヒ、ハツ
川と越えララロもある此処夷小屋あり休む是より此所の土人
サンケアイノと名ありしと檢所程にてカウマナイサニまて檢所も
るそマヲナイ拾四丁と云てトマリヲロ此処川口中或千間程打
聞きたる所あり夷家あり是より七里余も約て奇巖多し此

よ列る此處海中に水約多し晴態よく怪なる此処海中に岩
たう大岩ありて路通せと山より又直より下りたり是を
地一條と打敷たり

注此島なき威甚き赤土の地なり候地ありしと云ふ此島にて
多し候て島夷甚し彼水獣皮にて製せし器と候く候て
此皆夷賊凌ぐ所のありあり候地なり候地なり候地なり
候地なり候地なり候地なり候地なり候地なり候地なり
候地なり候地なり候地なり候地なり候地なり候地なり

夫よりヲテツコロの間九と里余も有へし奇あり瀑布あり其
水噴よりありて微塵より碎けて霧とあり瀑布の形とありし



又流水巖は海の苔のさびと作りり水程のゆくあつこの巖條も
落ありヲテツコロとつ小川を海つらる所して從ひ來るサア
二人と女の子の後まゝの途にまゝと此処より海岸浪打際とた
とつ磐石と作りし潮のさびは全身濡るもあり大勢
た石浜と替りてく嶮石長身通路後を所より此処とツウカイ
とつるまゝ此海中の岩は海嶮一匹横つり砂とつと相を統せし
小中りたる船なるれもさきも海中へ轉ひ落て初方知れは
危角する内日を暮かて雨と降出せしよりまゝの磐石と作り
せらふその上泥濘深く草の丈高くして唯急言急を
あつと嶮の山上に記あり又伏より岩水と紙をさるん又向ふ

大なる山あり巖をたれとも詮るゆ草根も取附枝も切つぬ
遠きより思慮中とつ深草の内樹木の横つり所とつ道は険
少くも方角とみせとつはまともサシケアイノ人各と指さきはま
手槍とつゆに建置る處より道は険とすつとみとつ海を
かけすつとつ此の敷敷とつ嶮とつ坂も水もたつ所も
て難所とつ泥濘深くま歩とつ失すれは忽ち深草の海を
指するあり余爰とつ疲憊極まり道は険とつ嶮とつ
人多く引きてまはとつとつ降つぬ幸にして夜二更の途も
有過し海にわたり流るるも腰とつけ須臾息とつた
壹部丁歩とつ候小舟なる

住此所おろくはホントマリを為し此道者ふ女の子并
セカチカナチ等也も通約い片し是形ち有るありナヨロ
よふ元八里半計と思つる志うはよ夏のさうしてあふはと信
や此難深なりぬあふあふも不審ちありむもツウカイの
信の轉ち石とて難おるれとも定うしてや此園のあり片との
ありんトツツの嶼とやういふも奥深く探んとの心をせや何
なぬあひりやういふ此地彼まよははるあつこふ一の難おそ
もあつこふ

此被新しん作りくろ小庵とて庭園の傍とて人の居と何きうも
あし唯火と焚くくきる跡のこむり皆く葉よお遠くくや何

とせんと存識も此道遊美居住ま人のけし是よん比バイカラ
サムシ地名と云所とて美住もあれとも留事もあつこふありを陸を
た道は今宵は思ひまゝとて夜とあ返へしとあふされも荷を背
くつ美人とも跡より来るともあふまゝと思へる溪也よ火と焚て
とろふ並せせし湯と沸とてい思もあされい曲とのく水と取
入く吾も余ら筆紙よ水と入焚火の寄とをさくれいよと沸とち
是よ砂糖のサ一貯てく銭入く吾もあつこふ焼果と一袋掛て
寄るの極美もあつこふたまは是りれ一雨と伝書とたよくを
根湯り取とち湯とあふ砂とあふる怨とあつてお被あぬ
此りも余等と水巻物と僕仕物と告サンケアイノ人のほして

其餘の皆後退しつゝ終日の宿れど皆を延と被りてお妙と道
とも余の賤るの能つと火を南りて濡る夜成乾く又と妙と
腹をく諸と暖めたるはサンケアイノ人ら少くも構あること
ちくき人火と守り居りつ夜半より迄より本膳と傳へ草延
と被りたるま打ゆぬ

二日昨夜より雨降續ききり余夜酌の以目覚て又火を以て
たふサンケアイノ人ら支度して延を推すむ初より是と妙と後
退する人足の近ひより初より其精悍感とて一まより一睡
あく朝より目覚て起るに雨は強く降るは兎角する内
後退する人足女の子とも進み居りたりと告まより漸と煮て

皆を食らり明日午飯の俵あれは其美あり一夫より
爰と出て後退と元々室も味り一以向ふの方より帆成りて
たふ余二使君の船より一と思へも同船き人をも初一稍進
つるに江ら又武甲余も外り一あり海面傍四五丁余も隔る
り所より停望せしむ被船より此方と見ゆ拙子あり余は何
とも思ふを過なくおきよ命して空砲を数と放せり須臾
若く被船よりも幸砲と若ら進りつより一使君の船より
と思ひきり遂中過せしむ心よかきものも舟人江に人と踏
踏せしむと帆と掛て走る船の進着るも目的もか一兎も角
思ひ煩くひく又き室余も外り一以表入き人出進りつ此の



カモイトノチツフありやと問フ^{ウチ}願^{ウチ}つきたり夫より小川^{ウチ}流^{ウチ}り
大船 船
ハイカシ^{ウチ}よ着きり

注^{ウチ}忍^{ウチ}ろく^{ウチ}此所^{ウチ}バイカラサム^{ウチ}か^{ウチ}と^{ウチ}思^{ウチ}つる^{ウチ}本^{ウチ}名^{ウチ}ハ^{ウチ}イ^{ウチ}カ^{ウチ}ル^{ウチ}サ^{ウチ}ン
夫^{ウチ}を^{ウチ}流^{ウチ}り^{ウチ}て^{ウチ}い^{ウチ}ち^{ウチ}也^{ウチ}船^{ウチ}番^{ウチ}屋^{ウチ}一^{ウチ}棟^{ウチ}あり^{ウチ}其^{ウチ}傍^{ウチ}小^{ウチ}川^{ウチ}あり^{ウチ}後^{ウチ}ら
崎^{ウチ}く^{ウチ}なる^{ウチ}岩^{ウチ}壁^{ウチ}地名^{ウチ}ハ^{ウチ}イ^{ウチ}カ^{ウチ}ル^{ウチ}と^{ウチ}春^{ウチ}の^{ウチ}り^{ウチ}サ^{ウチ}ン^{ウチ}と^{ウチ}流^{ウチ}は^{ウチ}下^{ウチ}る^{ウチ}と
い^{ウチ}ふ^{ウチ}俄^{ウチ}此^{ウチ}川^{ウチ}春^{ウチ}雪^{ウチ}融^{ウチ}す^{ウチ}る^{ウチ}流^{ウチ}る^{ウチ}る^{ウチ}なり^{ウチ}此^{ウチ}名^{ウチ}起^{ウチ}り^{ウチ}し^{ウチ}と
思^{ウチ}つ^{ウチ}

豊^{ウチ}吉^{ウチ}六^{ウチ}瓶^{ウチ}美^{ウチ}船^{ウチ}は^{ウチ}荷^{ウチ}物^{ウチ}と^{ウチ}積^{ウチ}余^{ウチ}より^{ウチ}先^{ウチ}に^{ウチ}此^{ウチ}所^{ウチ}より^{ウチ}居^{ウチ}居^{ウチ}り^{ウチ}余^{ウチ}は
云^{ウチ}わ^{ウチ}し^{ウチ}い^{ウチ}殿^{ウチ}ハ^{ウチ}昨^{ウチ}夜^{ウチ}ノ^{ウチ}タ^{ウチ}シ^{ウチ}ヤ^{ウチ}ム^{ウチ}泊^{ウチ}り^{ウチ}し^{ウチ}て^{ウチ}今^{ウチ}朝^{ウチ}物^{ウチ}帆^{ウチ}し^{ウチ}あ^{ウチ}ひ^{ウチ}し^{ウチ}と^{ウチ}問
て^{ウチ}先^{ウチ}の^{ウチ}船^{ウチ}の^{ウチ}客^{ウチ}跡^{ウチ}を^{ウチ}得^{ウチ}る^{ウチ}直^{ウチ}養^{ウチ}ハ^{ウチ}昨^{ウチ}夜^{ウチ}ノ^{ウチ}タ^{ウチ}シ^{ウチ}ヤ^{ウチ}ム^{ウチ}泊^{ウチ}り^{ウチ}た^{ウチ}る^{ウチ}は

か^{ウチ}は^{ウチ}只^{ウチ}面^{ウチ}湯^{ウチ}し^{ウチ}て^{ウチ}事^{ウチ}情^{ウチ}と^{ウチ}も^{ウチ}福^{ウチ}た^{ウチ}る^{ウチ}孫^{ウチ}は^{ウチ}余^{ウチ}ハ^{ウチ}僅^{ウチ}に^{ウチ}五^{ウチ}六^{ウチ}里^{ウチ}の^{ウチ}遠
く^{ウチ}ノ^{ウチ}タ^{ウチ}シ^{ウチ}ヤ^{ウチ}ム^{ウチ}名^{ウチ}地^{ウチ}より^{ウチ}い^{ウチ}ち^{ウチ}け^{ウチ}り^{ウチ}し^{ウチ}遠^{ウチ}懐^{ウチ}つ^{ウチ}は^{ウチ}り^{ウチ}り^{ウチ}余^{ウチ}愛^{ウチ}ふ^{ウチ}く
河^{ウチ}平^{ウチ}の^{ウチ}方^{ウチ}氏^{ウチ} 河津 平山一^{ウチ}書^{ウチ}と^{ウチ}出^{ウチ}せ^{ウチ}り^{ウチ}是^{ウチ}は^{ウチ}そ^{ウチ}の^{ウチ}事^{ウチ}情^{ウチ}ハ^{ウチ}直^{ウチ}養^{ウチ}獨^{ウチ}り^{ウチ}た^{ウチ}る^{ウチ}
と^{ウチ}お^{ウチ}り^{ウチ}ハ^{ウチ}唯^{ウチ}突^{ウチ}岨^{ウチ}の^{ウチ}候^{ウチ}と^{ウチ}探^{ウチ}り^{ウチ}し^{ウチ}り^{ウチ}故^{ウチ}述^{ウチ}せ^{ウチ}り^{ウチ}爰^{ウチ}と^{ウチ}出^{ウチ}て^{ウチ}石
浜^{ウチ}と^{ウチ}半^{ウチ}里^{ウチ}程^{ウチ}も^{ウチ}て^{ウチ}ノ^{ウチ}タ^{ウチ}シ^{ウチ}ヤ^{ウチ}ム^{ウチ}と^{ウチ}名^{ウチ}を^{ウチ}考^{ウチ}へ^{ウチ}り^{ウチ}

注^{ウチ}此^{ウチ}地^{ウチ}西^{ウチ}向^{ウチ}小^{ウチ}石^{ウチ}浜^{ウチ}五^{ウチ}六^{ウチ}丁^{ウチ}と^{ウチ}續^{ウチ}き^{ウチ}た^{ウチ}り^{ウチ}右^{ウチ}ら^{ウチ}ア^{ウチ}サ^{ウチ}ウ^{ウチ}シ^{ウチ}マ^{ウチ}キ^{ウチ}岬
たり^{ウチ}ら^{ウチ}ホ^{ウチ}ロ^{ウチ}ヒ^{ウチ}ラ^{ウチ}の^{ウチ}サ^{ウチ}キ^{ウチ}岬^{ウチ}と^{ウチ}お^{ウチ}對^{ウチ}し^{ウチ}て^{ウチ}後^{ウチ}身^{ウチ}ハ^{ウチ}其^{ウチ}間^{ウチ}一^{ウチ}小^{ウチ}湾^{ウチ}と
お^{ウチ}し^{ウチ}遙^{ウチ}南^{ウチ}に^{ウチ}ノ^{ウチ}ト^{ウチ}口^{ウチ}の^{ウチ}崎^{ウチ}と^{ウチ}名^{ウチ}を^{ウチ}一^{ウチ}條^{ウチ}の^{ウチ}川^{ウチ}あり^{ウチ}て^{ウチ}此^{ウチ}小^{ウチ}岸^{ウチ}に^{ウチ}
番^{ウチ}屋^{ウチ}一^{ウチ}棟^{ウチ}夷^{ウチ}家^{ウチ}五^{ウチ}六^{ウチ}軒^{ウチ}と^{ウチ}名^{ウチ}を^{ウチ}考^{ウチ}へ^{ウチ}り^{ウチ}其^{ウチ}の^{ウチ}漁^{ウチ}場^{ウチ}た^{ウチ}り^{ウチ}本^{ウチ}名^{ウチ}ハ^{ウチ}ウ^{ウチ}ラ
タ^{ウチ}サ^{ウチ}ン^{ウチ}と^{ウチ}り^{ウチ}紙^{ウチ}束^{ウチ}地^{ウチ}は^{ウチ}同^{ウチ}名^{ウチ}あり^{ウチ}と^{ウチ}記^{ウチ}し^{ウチ}つ^{ウチ}と^{ウチ}れ^{ウチ}く^{ウチ}ノ^{ウチ}タ^{ウチ}サ^{ウチ}ン^{ウチ}と^{ウチ}名^{ウチ}を^{ウチ}

雲ありと云ふ

此頃より使君の泊る所へ所ありて村垣後君らエンルモ
コマフと引返され要地と云ふれり云々云々云々云々云々
家と唱ふ前して菊川是なりと云ふ菊川は先づ先づ
よと云ふ余クニエンコタンと云ふ十四日湯ありせされ
是と喜ひ速く流る此水は快くお臥きり此夜車の以
雷鳴あり

同日朝雨を以てり歌きり今日福夷船と云ておる風
強けきと海上穏あり武里余とて小川ありトウブツと
云ふ云々上流して明番をりて小憩と

注此所西向流るる一丸茶山極末之川あり此水は沼あり地名ト
ウブツと沼の落口と云ふあり地名此処の川より云々起る
船を渡りて乗船し着出る磯を併して向ふ此所ノトロと云
凡武里余もけり云々云々又此岬と云ふて武里も初トコタン
と著此雲小山と後ろりして湾と云ふあり 後ろり小山と
沼あり離場所のよと云ふ番屋も六間と拾百程あり毎天乃
社あり夷家も十軒程あり也總て此辺の冬は空宿なりと
あり雷も五六尺位より深く降る云々云々

注此地深航申南向雲原右の方ノト岬たりエンルモコマ
フの岬對して突出して間モコマフ迄一大湾を成りきり

吾氣志市
画

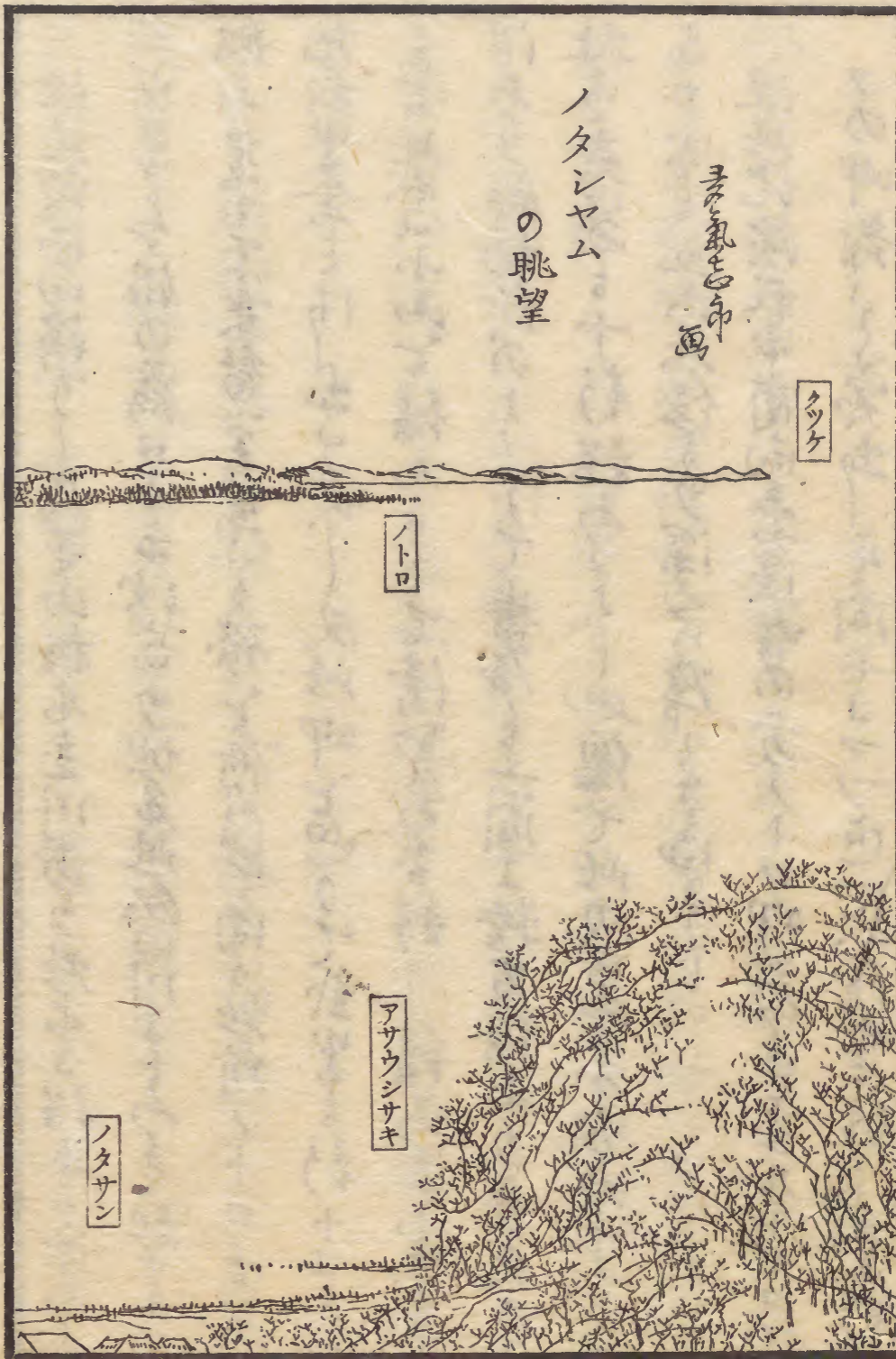
ノタシヤム
の眺望

クツケ

ノトロ

アサウシサキ

ノタサン

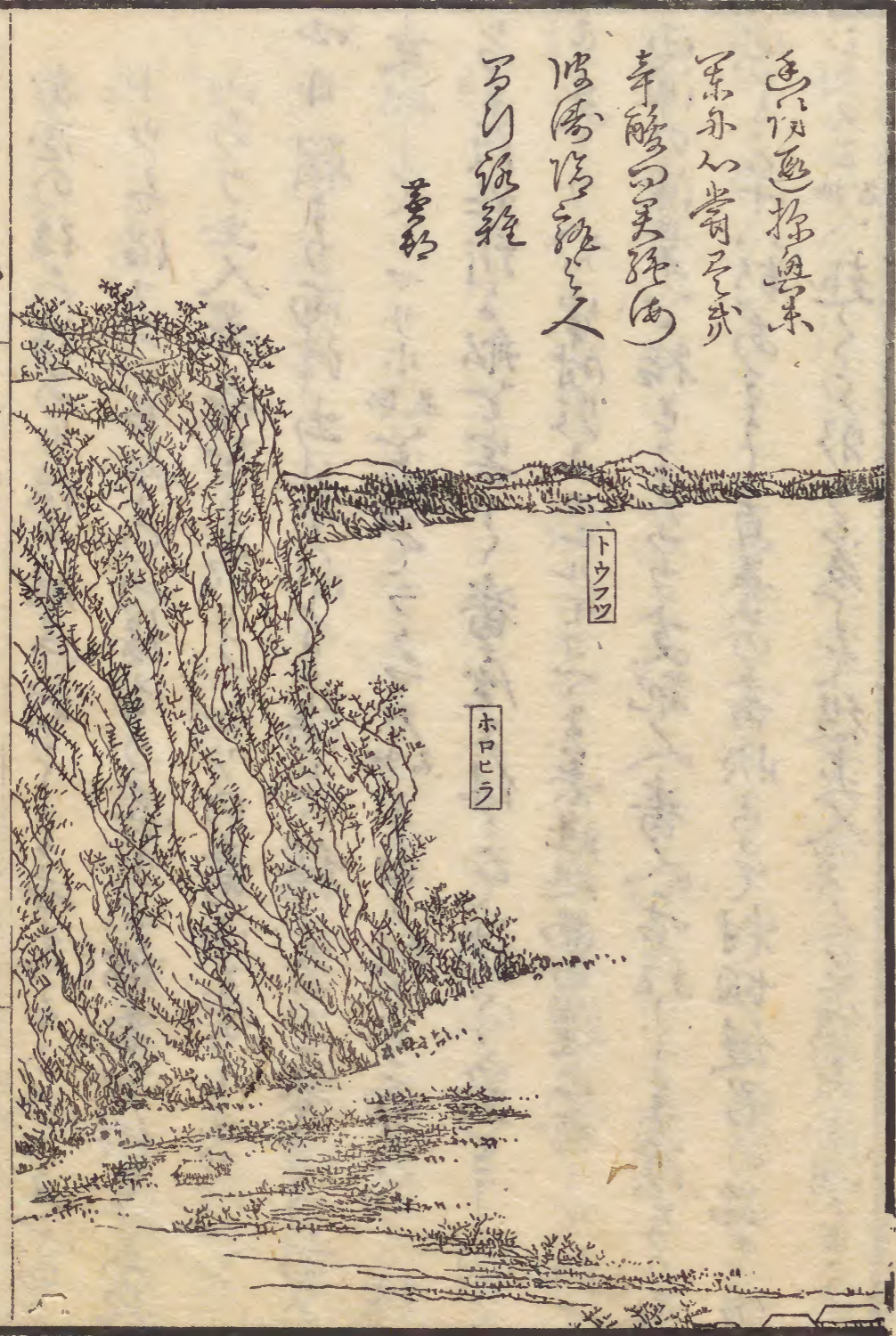


吾氣志市
画
ノタシヤム
の眺望

吾氣

トウツツ

ホロヒラ



番屋の後ろ沼あり傍て此名起りし本名トウコタンあり
トウと沼コタンと起りし傍あり其上は橋蓋スリバチと依りあり
山あり出入等はとまたリイシリの妻山ありと云

四日朝より雨降出されとも海は穏なり床潭の前より
乗船してトマリホ名地と過てラクマカ名地より西より雨降り
當道は此所の船と寄りて番屋の体とて渡りて夜とて
とまよりハハ半時迄はエンルモコマと云此処西の運上船とて
西浦の漁業と括とるなり支配人番人居住し手渡り夷
家も二千ハ朝ありし直養の書状ありて村垣使君の海を過
シラヌ名地に赴くとりありて後夷人並に船乗り酒を賣

て此り迄の勞は慰めし此運上船の志より高山の頂を見
番人は尋らば夷人トウキタイ名地と云又メノ子山と云此山とて
高き山とて洋中より望めばリイシリ名地と似しむるメノ子の
稱ありと故曰床潭の後ろの方よりと云る山あり

徑此所南成より向ひトロコ小野一たりみしこの岬あり是より
号しラエンルレと神のまゝなりコマフと内といふ磯あり
是の暗礁ありし内は太船と繋く後ろの方ラカイノホリ
名山ホロノホリありと云高山あり此間より南流ルウタカの河出
越るふよ海に運上船を合て或拾余棟夷家と拾六軒
毎天社ありと美しむる建あり

唐林 言 卷之 廿

五日今日の朝より晴り

注此島濛濛濡きまゝと四季の景色ありて無うて晴ると
十日より一日もあまの雨きこたぬありて此モコマフ二里前
後の処らまで霜降りよりの考ふも敢て今日晴るとい
ふも無うへ此辺よりトコタンまで六番屋敷あり人烟
を疎ありこれ依て志くくむるあり

是より乗船してヒロチ地名ヲホトマリ地名ありと近く何色も山の
裾にて夷家ありともお園をたつ処ありとトコタン地名ありと云
所より上陸して昼飯をとりて番屋敷にて所見と賦しきり

處々黄菊倚翠微草深古徑没柴扉枕灣沙岬衝波瘦繞舎

溪流經雨肥窗小唯着山半截江平相映鳥雙飛漁村午靜

閑無事一縷炊煙人未歸

注此地溪形西向小石魚うく後ろの方平山概本をモコマ
フより六里半陸行の止宿所あり処あり番屋敷小座
等あり夷家むうへあり今モコマフより刻取て志朝も平佐
夫より又舟に乗りて七時の前トコンホより着て此処を番屋
敷と云ふあり

注此所西向素溪在りウエンヒラと云ふ山の岬右ヲタライチ
と云ふ一條の砂岬對峙して一小灣を形し川あり其南
岸番屋一枚板くくり舟より夷家を朝あり申の方十重里に

唐林日記 卷之 廿

津波
津波
津波
津波
津波
津波
津波
津波
津波
津波

ト、シマと眺む風系いん方明く

六日昨夜半はより雨降出し曉の降より晴くなり前夜より乗
船と海上数十里ト、シマ城見らうニココロ^{地名}ナエホ^{地名}マツナ
^{地名}と名てハハ時迄モイレトマリ^{地名}は善と今日陸をせし所も
昨の路の如く皆山の裾のまゝと平地サレモイレトマリ^{地名}と
サレ打聞きたる処あり此番をよて帆立貝と焼の皿を用ひた
り風流るまゝの形り

注此処本文の如く山の裾がサレ打聞一処は番をあり余も
さよ止宿と後形西向よりト、シマと對しより此島は
全海嶺多きより此島はわつとこそ周囲七里より此処海と

七里有とや又南所の地名モイレとを休トマリと船瀬と云
像ありトコンホより七里條あり

七日終日雨今朝の荷物と船積よりて余は陸行しきり
ありモイレトマリよりレヨウニ^{地名}ヤケ丸拾里余の万夷家
を新もあし中ふら山と遠く打聞きたる処も河邊と小港
御もなすし小川新しありて何處も歩ありとあり行と
いふ処も小憩しきと雨まゆ強く降を食をきき所も
ちし像てはありて起行せりヤウニ^{地名}のサト手前も海所も
從へて遠見とれい屋根のやうなる岩あり是をウエニ^{地名}と
いふウエニと名するのチユニと名するありし此岩は、名あり

書本
書本
書本
書本
書本
書本
書本
書本
書本
書本

海少し霧多日ら船を入るるのあはさるなり此種ありて此岩の
 裾四つ所を越して七つ時色にヨウニ地^名よきと
 注流取西向下と小石ありて後ろの方峨いた高山極本流也
 たりヤエニシホ地^名右ウエニテシ地^名糸ひ実出たりて河川或は針
 の間一小湾とわたり又末の方よりイニシ地^名レブンニシ地^名を
 見風景のいん方ありて止宿所一棟并に妻家二軒ありて工
 レトマリより九十里あり
 八日朝より小雨今日を渡初はシヨウニ地^名と出て直に屏風の
 如くありて絶壁あり海岸よりわけて道なきと少く陸の方切
 岸と攀上りて崖を系と四立下りてゆく海流ありて是

より小川をり越して又絶壁の裾をりて出てアカラカ地^名と云
 高山の裾と出る此辺大絶壁は極美松の磯訓て軒は無りたる
 さゆ奇素いりん方ありてまより大絶壁を渡りて大なる瀑布
 式ヶ所あり唐岩出浦中より始て下る大流たり中凡二間
 と有る一々ヶ所は少く狭れども式所より居たり実奇観
 といふ處一此処と出て岩の少くわけて屋のわくふありたる
 下は小憩して此石階は燕の巢あり素人探りて燕の雛を
 得たり美りたる羽毛も見たりこれいふこととの処へさせきり
 夫より爰をわけてま里半余りてシラヌ地^名よきと村垣使君
 直養字はんくは月の辛若と倍り合せて皆く急片記をたす

レラヌシ

弁天社より
眺望

ト、レマ

アカラカイ



水音中の九月初五のころ

あゝの三女の御衣の巻

御衣巻の御衣の巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻

はるねりてはるねりの巻



ソウヤ

唐太日言 卷之十一 三十一

百連一人は船乗りも酒を飲むと方と愁きり

とてく夷人とも思直小児の如くして憂をくまきこのあり様は
の同好も少しも物争ひはるまもあし長老ありとて別よ
る教も体もあく妙福ありとて侮るもあはれ他人の
家へのても食用の手助けをくく家人の如く余は郷土
したるサーフニアイノも訓良あるものよて小川ありとて余
と負ふく渡りさし少しもいねある体なり若くは夷人た
の戯も強く成りては唯打笑ふのなりき

評去歲夏余シラヌシある毎天社へ簀へ此方彼方と眺望する
ふ所の方々アカラカイと傳へ南の方々はノト口乃

岬海中へ突出し一抹の雲と疑つる末の方々はリイシリレ
フシシリ海の中央は青波揺るよと後ろの月難樹陰森た
る中は柳の白きものいふゆと何と問へ夷人等カリシハ
のイフイケと答へしは是桜花なりと此帖五六月の以今
と盛りと聞くとありよりて先生の區春許潭の弁天社に
さけあひりかうらたと思ひおし日記のそしに書附新
今志のぬの圖を繋く併せておし志のそしに
此巻の壑尾の如きものあり

一枝紅艶弄嬌柔六月初旬香正稠夷虜何須詢國境此

荅開慶是 皇州

唐書

卷之

三十一

松浦竹四郎評注

安政七年正月發兌

中央圖書

江戸書物問屋

日本橋通北十軒店

播磨屋勝五郎藏版

